

白道会大会 信楽峻磨（元龍谷大学学長）先生 現代人の心は病んでいる

去る八月二十四日から二十六日まで、蔵本通支坊で、信楽峻磨先生（元龍谷大学学長）をお迎えして白道会大会が開催されました。

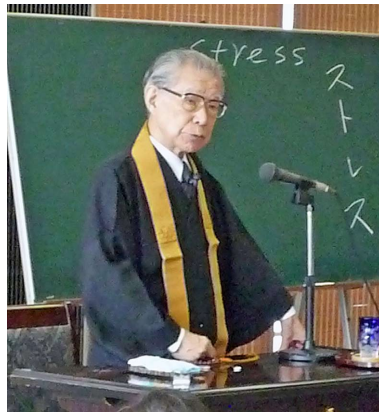
社会に開かれたお寺を目指してはじめた公開講演会も、今年で六回目になりました。今年のご講師は信楽先生ということで、前売り券は早くから売り切れてしまいました。当日券を求めて呉市内だけではなく、県内外より多数の参詣者で本堂は満堂となり、余間（ご本尊の両脇、七高僧や聖徳太子がご安置してある一段高くなっている畳の間）まであふれました。

さらに今年は、「信楽先生と話そう」と銘打って、一方通行の講話ではなく、対話形式の法座を二日間に行いました。「病気で生きる気力を失っているつれあいにどう接すればよいか」「幼くして死別した家族にはもう会えないのか」等々、まことにさまざまな質問が出されました。先生は、一人ひとりに丁寧に対応され、全てその場で解決という訳にはいきませんが、この日ばかりは脱葬式仏教、現代を生きる個人が抱える問題に対応する場にお寺がなることができたのではないかと思います。（以下は講演の要旨）

不安・恐怖・怒り・絶望

現代の日本のありようは、どこかが病んでいる、皆さんもご同感のことでありましょう。その心が蝕まれているということの切身は一体何なのか。専門家は色々分析するであります。皆さんご承知の言葉で言えばストレスという問題であると思います。ストレスとは緊張すること、心の糸がピンと張っている状態。現代は昔に比べてストレス（緊張）が非常に強くなっているんだと思います。そのストレスは、さらに細かいとうと、原因がはつきりしない、先行きが見えないところからくる「不

安」や、原因ははつきりしているが、どうにもすることができないところからくる「恐怖」、また複雑な人間関係から起こる「怒り」、生きる未来の希望を失う（失った）「絶望」などがあります。これらは多かれ少なかれ昔からありましたが、現



代人は上手くコントロールできなくなってきた。

このようなストレスに対しては、酒を飲む、旅行する、グチを聞いてもらうなど、人間関係で解消する方法があるが、ここでは、もうひとつ宗教的な方法で解決する方法があることを申し上げたいわけ

「持つこと」と「成ること」

心理学者のエーリッヒ・フロムは「持つ」と「成ること」を問題にする。人間が生きるということは「持つこと」である。持つこと、つまりは物。もうひとつは「成ること」。私に引き寄せると「成ること」。成ることは心を問題にしている。現代人は物ばかりに心を奪われていて、「成る」こと、心を育てることを忘れていて、心をついて、人間社会の中で、人間らしい心を少しずつ育てることを忘れてい

お仏壇を柱として心を育てる

心を育てる、「育つ」という言葉の意味は、中国では「子供に肉がつく」という意味。日本では二説ある。「菓立つ」から来ているという説と、もう一つは「添え立つ」。

あさがお
朝顔が咲くためには杖を立ててやらないと綺麗な花は咲かない。親が子供のそばに立つてやる、心の支柱、杖になるような何かを子供に渡してやる時に、はじめて真つ当に大人になってゆくんだという考え方。ただ肉がつくだけではなく、私たちは何を支えとし、杖としているのか。心を育てるということはここが大事。確かな杖を持っているのかどうか。

われわれは先祖からお仏壇を大切に学んでいます。おじいちゃんもおばあちゃんも孫もひつくるめてお仏壇に手を合わす、お仏壇を杖とし、柱として育つ。「持つこと」、お金には全く関係ないけれども、心を育ててゆくんじやありませんか。都会の生活にはこういうものがなくなってきた。先日も燃えないゴミにお仏壇が棄てられていた。若い者が

棄てたんだらう、心を育てることを忘れた人間がどういう人間になっていくか、およそ見当がつく話ですね。死んだ先の話ではない、ここでどれだけ心が育つか勝負なの。救われるとは成つてゆくこと、お仏壇を柱にしながら成つてゆく、育つてゆく、なつていないのが成つてゆく、育てられたことを救われたという。

救われるとは

「すくう」という字は「救」「掬」「援」など色々あるが、仏教での救いは「済度」という。「済」は水をととのえる、「度」はわたるの意。インドの言葉で「ウツタラナ」。人生は、さまざまな悲しいこと、苦しいことが多く、若いときもそうだし、年取つてもそうじや。私のように後がない老人になつても同じ事や。なかなか思う

ように、この世の中いかんもんや。それを、一歩ずつ一歩ずつ渡つてゆく、超えてゆくの。そういう確かな足腰をお育ていただいたのが「お救いに与つた」ということです。これは私も偉そうに言える生き方をしてるわけじやありませんけどね。色んなこと

が起きてナンマンダブと。止まっちゃあならんの。とにかく半歩でも、またその半歩でも前に進んでいく、それがね、すくわれた者の姿ですぞ。悲しみや苦しみの前に立ち止まって、もうどうしようもないと言つて、うづくまつちゃあなりませんぞ。そういう確かな心を、確かな生命を、確かな足腰をお育ていただくの。これが仏法を学ぶと言ふことです。

横超

また親鸞さまは「救い」を「横超」ともいう。横つ飛びに超える。超えがたい人生を不思議にも超えてゆく道があるぞという。この世の中を渡れても、死が

渡れるかどうか勝負ですぞ。豊臣秀吉は「難波のことは夢のまた夢」、全てパーだと言つて死んだ。これじやあ生きた意味がないんじやないか。それぞれの人生精一杯生きて、ありがとう、お世話になつたと、前を向いて死ねるかどうか。その、前に向いて死ねる姿を往生というた。往生は「往いて生きる」、「死ぬることは生きることだ」と教えた。それは渡るといふこと。死を真つ当に正面に据えて、一歩ずつ死に向かつて生きて行く、死を生きるつちゆうことや。新しい生命の世界になお抜け出して生きてゆく、それが往生と言ふことの意味でしょう。そういう人生を最後に迎えることができるならば、おすくいに与つたという、これが真宗の教えです。

ま、私も含めてどういふ死に方をするか、偉そうなことは



公開講演会の様子。満堂の参詣者。

言えませんが。ともかく死のことはさて置いて、死を迎える私たちの人生、前を向いて、死を見据えて、「死もまたわが人生なり」、死を生きてゆくという、死さえも超えて生きてゆくというような、大きな生命を私たちがいだいて、そういう確かな力をいただいて、そういう確かな杖を持つてお育ていただくならば、超えていけるんです。私たちの前をたくさんの人たちがお念仏を申してそういう形で死を超えていったんです。我々もまた、しかとそこに立って生きて参りましょう。現代のさまざまな問題はもとに複雑であつて難しい問題ですが、それはそれとして、私たち一人一人の人生を、「ありがとう、お先にゆくらな」って。そういうように後ろ向きに孫子あひこに挨拶して、前向きに死んでゆける。仏法のない人はね、前が見えんようになるから。前がコンクリートになるからね、前の話はせんのよ。「昔はよかつたな」って。ダメよ、年を拾うたら、後ろの事をガタガタ言いなさんなよ。前を向いて生きて行くのよ。前を向いても見えんというなら、それはお念仏ねんぶつを申したら見える世界があるの。心を豊かに育てたら、見えてくる道が開けてきます。どうぞ、私たち一人一人の人生を、心を育てて生きて参りましょう。

真宗カウンセリング ワークショップ



去る七月十三日～十五日、広島市神田山荘で真宗カウンセリングワークショップが行われました。

今年（きょうねん）は京都の真宗カウンセリング研究会けんぎけんと共催きゆうかいということで、水戸みとから福岡ふくおかまで、日本全国から多数の参加があり、途中からグループを分けて行いました。例年は一泊二日で行うのですが、今年（ことし）は松岡まつか先生のご提案で二泊三日にして、じっくり時間をかけて行いました。人間の心は機械きかいではないので、すぐには変わりません。関心のある人に、こういうことをするのか聞かれても、上手く答えられなくて困るのですが、自分自身に対しても

相手にも、横着せずよこがせずにじっくり腰を据えすて、向き合うことが大切なんだということことは分かったような気がひがします。基本的に非構成的なエンカウンターグループ方式こうせいてきです。心の温泉とも言ういみたいですよ。

今年の夏至も でんきを消してスローな夜を。よる

「でんきを消してスローな夜を。百万人のキャンドルナイト。」夏至げしの日と冬至とうじの日の夜に、二時間だけロー



ソクで過ごすイベントです。この日は、東京タワーとうてんかくも通天閣あおやまどおも、青山通りのシャネルも電気を消します。少しづつ広く浸透しんとうしてきている感じがしますが、今年も、くれ環境市民の会の皆さん

にお越しいただいて、その日に使うローソク作り、残ろうのこ（使い古しのローソク）からアロマキャンドルを作りました。

